

売薬の意匠あれこれ 〈その7〉 小型看板

北多摩薬剤師会会長・立川市薬剤師会会長代行 平井 有 (ひらい・たもつ)

薬の看板は時代と共に素材や形態を変化させてきました。江戸時代には大きな板に文字を彫り金箔を貼った金看板が競うように作られ、薬屋の店を飾りました。明治初頭には、江戸時代の錦絵の技術を受け継いだ職人による色鮮やかな紙看板が登場しました。電柱の看板や民家の壁に打ち付けられたホーロー(琺瑯)看板も昭和の中頃までは、あちらこちらで見かけることができました。大型のものとしては、ビルの屋上看板やネオンサイン、アドバルーンなども登場しました。数は少なくなりましたが、新幹線の車窓から見える旅情を誘う野立て看板もまだ健在です。

今回ご紹介するのは、そのような大型の看板ではありません。薬局の店内に置かれた小型の看板です。今では

全くの素人でもパソコンからテンプレートをダウンロードすればお手製の立派なPOP広告を作ること可能になりましたが、そんなPOP広告の元祖とも言える製薬メーカーの小型ディスプレイ看板などをご紹介します。

ホログラム加工で製品が手前に浮き出ているように見えるようにしたり、複雑な型抜きをしたり、目立たせるために様々な工夫が施されています。ステンレスの流し台が普及し台所がキッチンと呼ばれるようになった昭和30年代の核家族が描かれている「トロピンC」や今では過去の病気となった回虫や蛭虫の虫下し「ネマシン」など、POP広告から人々の生活や病気の移り変わりを見ることができます。



ホログラム加工で存在感を示す「バスロマン」



凝った型抜きの「ボラギノールクリーム」



ニューファミリーがモデルの「トロピンC」



アート作品のような「アクロマイシン軟膏」



ヘアスタイルや服装が昭和の「ヴィーナス錠」



舶来品のようなデザインの「エナルモン」